

令和 4 年 5 月 18 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13222

研究課題名（和文）An Alphabet of Talesにおけるラテン語原典語彙・文法の受容

研究課題名（英文）Reception of Latin vocabulary and grammar in An Alphabet of Tales

研究代表者

三浦 あゆみ（Miura, Ayumi）

大阪大学・言語文化研究科（言語文化専攻）・准教授

研究者番号：00706830

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、15世紀初頭にラテン語から英訳されたAn Alphabet of Talesにおける語彙や文法がどの程度原典の影響を受けているのかという、一次資料の入手が困難なために長らく行われなかった課題に挑んだ。ラテン語原典との照合作業から得られた実証的なデータを元に、3年間の研究作業を通して、従来ラテン語の影響を指摘されていた語彙や文法の実態を検証したところ、本作品で初出の語彙や生起頻度の低い一連の文法項目および一部の非人称動詞の用法は、先行研究で言われているようなラテン語原典を忠実に訳した結果とは言いがたいことを発見し、当時のイングランド北部におけるラテン語の受容の一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、(1) 一次資料であるラテン語原典のエディションが容易に入手できないがゆえに長年行われてこなかった、An Alphabet of Talesとラテン語原典における語彙・文法を詳細に比較調査したこと、(2) 先行研究では本作はラテン語原典の忠実な訳だと言われているが、それに反する多くの事例を提示し、本作の翻訳のスタイルやラテン語からの翻訳に基づく語彙・文法について、先行研究での見解を問い直したこと、結果(3) いまだ研究量の少ない15世紀初頭のイングランドにおけるラテン語の受容の一端を明らかにしつつ、翻訳作品の言語の研究と言語接触の研究の連携を計ったことに学術的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This project focussed on An Alphabet of Tales (AT), which was translated from Latin in the early fifteenth century, and investigated the extent of Latin influence on its vocabulary and grammar, the question which has not been tackled for a long time due to the difficulty in accessing primary sources. On the basis of empirical data obtained from collation with the Latin original, I examined the use of vocabulary and grammar in AT which are considered in previous studies to have been affected by Latin. Over three years the work showed, among other findings, that contrary to the claim in previous studies, words first attested in AT, the series of infrequent grammatical items and some impersonal verbs are unlikely to be the outcome of faithful translations of the Latin original. The project revealed a part of the reception of Latin in the north of England at the time.

研究分野：英語史

キーワード：中英語 ラテン語 翻訳 言語接触 An Alphabet of Tales 語彙 文法 非人称動詞

1. 研究開始当初の背景

An Alphabet of Tales (以下 *AT*) は、ラテン語で書かれた *Alphabetum Narrationum* (以下 *AN*) から 15 世紀初頭に北部方言で英訳された。本作は大英博物館所蔵の一写本のみで現代に残っており、同写本に基づく二巻本のエディションが Banks (1904-1905) として刊行されている。*AT* および *AN* は約 800 もの短い説教的教訓話 (sermon exempla) からなる散文作品で、各話の表題のアルファベット順に全体が構成されており、中世ヨーロッパでの一般的な暮らしに関する様々な逸話を知ることができる。

AT は口語表現が多く、15 世紀の英語に関する貴重な資料だが、言語学的研究の対象としては注目されてこなかった。訳者が不明で、著名な作品ではないこと、唯一のエディションである Banks (1904-1905) において当初計画されていた、イントロダクション、グロッサリー、索引からなる第三巻が刊行されなかったため、研究の典拠となる資料が原文を除き十分に整っていないこと、中英語の代表的なコーパスに含まれていないことなどが原因だと考えられる。*AT* の言語を論じた希有な先行研究である Fittabile (1957) や Johnson (1993) には包括的なグロッサリーが含まれているが、*AT* の言語的特徴に関する議論は Fittabile では簡素な記述に終始しており、Johnson では音韻分析に基づく正確な方言の特定に限られている。また、双方とも、翻訳作品において必須の作業である、原典との比較対照が行われていない。英語史研究者の間でも、*AT* における語彙や文法の例を取り上げる際は、「ラテン語原典の影響かもしれない」という短いコメントの域を出ることがなかった。

AT と *AN* との言語学的な比較がこれまでなされなかったのは、Banks (1904-1905) が参照した *AN* の写本二点のいずれもファクシミリやエディションとして研究者が容易に利用できる状態になかったことが大きい。この状況は、*AN* の複数の写本を照合した Brillii (2015) が刊行されたことで打開された。中英語の専門的辞書である Middle English Dictionary (MED) の改訂版が 2018 年に公開されたことと、中世イングランドにおける言語接触に関する昨今の活発な研究状況も、*AT* における語彙の使用・選択を研究する環境の整備につながった。

2. 研究の目的

本研究は、研究環境が不十分なゆえに長らく行われてこなかった *AT* と *AN* の比較に着手し、*AT* における語彙や文法が *AN* の語彙や文法にどの程度影響を受けているのかについて体系的に調査することを主な目的とした。Fittabile (1957) は *AT* は *AN* の「忠実な」訳だと述べているが、同論文で言及されている文法項目のいくつかを Brillii (2015) を用いて照合したところ、*AN* を直訳している場合と *AN* とは構文が大きく変わっている場合があった。本研究は、*AT* 全体を通してこの照合作業を行うことで、従来ラテン語の影響を指摘されていた語彙や文法の実態を見直すことを目指した。

古・中英語期の翻訳作品におけるラテン語原典の受容に関する研究は長い歴史を持つが、取り上げられる語彙や文法、作品の種類に偏りがあり、*AT* が訳された 15 世紀は最も研究量が少ない。*AT* は一作品だがエディションが二巻本からなる長編であり、豊富なデータの取得が見込まれた。さらに、英語史におけるラテン語の受容は文法面において近年見直されつつあり、限られた条件の下でのみ統語的借用がなされることが一部の項目で分かっている。本研究はより多くの文法項目および語彙を対象とすることで、近年の研究における見解を強化・発展させることも目指した。

3. 研究の方法

本研究は、*AT* の語彙と文法に焦点を当て、*AN* の該当する語彙・文法と照合し、*AT* が *AN* の影響をどのように受けているのか、その受容の程度を明らかにすることを目指した。語彙は名詞や動詞といった内容語の選択を対象とした。文法は Fittabile (1957) の統語法に関する章で述べられている、特殊な構文や用法などに注目しつつ、*AT* を講読する過程で対象項目を追加した。また、講読と並行して、*AT* の原文と *AN* の対応箇所をデータベースに保存した。分析時には特に以下の点に注意した。

- (1) *AT* で初出または 15 世紀初頭の英語ではまれな語彙・文法が見られる場合、どのような特徴や傾向が認められるか。たとえば、その語彙はどの言語に由来するのか。宗教や政治、文化など概ねどの分野に属するのか。*AT* で初出の場合、他の作品には見られない hapax legomenon なのか。
- (2) *AT* では、複数種類の類義語が使われていることや一つの動詞が複数の用法を持つことが先行研究から分かっているが、それらの使い分けは *AN* での使い分けを反映した結果なのか、*AT* の訳者独自のものなのか。
- (3) ラテン語の影響で誕生した、または強化されたと先行研究で言われている文法 (統語法) は *AT* と *AN* との比較でも裏付けられるか。
- (4) *AT* と *AN* で構文に大きな違いがある場合、その違いの種類と要因は何か。

4. 研究成果

本研究の成果は、(1) AT における語彙、(2) AT における文法、(3) その他に大きく分けられる。

(1) AT における語彙のうち、OED や MED によると本作で初出とされる語彙について調査した。計 103 語の大半は名詞で、様々な分野に属するが、7 割以上は AT で 1 例しかなく、半数以上は中英語期では AT にしか用例が見られず、3 割近くは中英語期のうちに消滅し、残った半数近くは現代英語では消滅しているか、一部の方言に特化したまれな語となっている。したがって、これらの語の使用は AT 内外で制限されており、AN が訳されたからこそ誕生した語が大半ということになる。

一方で、訳者は AN におけるラテン語の語彙を単に取り入れたのではなく、新語全体の約 66% は当時の英語にあった語の複合・派生に基づいている。これらの複合語・派生語の大半は AN に対応する語句があるが、ラテン語の語幹をそのまま用いている例は 3 割ほどで、英語の接尾辞を用いている場合も見られる。ラテン語の語幹をそのまま用いた語は宗教用語、抽象的な概念、職業を表す語に多く見られる。一方で、翻訳借用による語はより多様な分野にまたがっており、英語本来の要素を活用している場合が多い。また、訳者は AN に対応する語句がない場合であっても新語を導入しており、これらの語の多くは既存の英語語彙に基づいている。

以上のことなどから、AT における新語は総じてラテン語の影響が限定的であることが分かった。AN に対応する語句があることが多い点では AT は忠実な訳だと言えるが、訳者は一般の聞き手に馴染みのある英語由来の語や既存の語彙を優先的に用いたことが窺える。結果、新語の使用に関する限り、AT は内容面では AN に忠実だが、具体的な語彙の選択においてはラテン語の要素は限定的である。このような翻訳方法を採用することで、訳者はラテン語を介さない者たちへの配慮をしつつ、作品の言語的なバリエーションを保ったのだと考えられる。

(2) AT における文法のうち、本作では「まれ」あるいは「時々生起する」と Fittabile (1957) の統語論に関する章で述べられている、以下の 10 種類の文法項目についてまずは調査した。

最上級 baddeste: AT における用例は 1 例のみであり、AN では *despicior* 'I am despised' に対応している。AT の他の箇所が生起する *warste* 'worst' がなぜ当箇所でも用いられていないかは不明だが、*despicior* は非常に強い憎悪を表すこと、(最上級とよく共起する) 範囲を表す *in* の前置詞句が AN で用いられていることから、少なくとも、当箇所以最上級を使用することについてはラテン語の影響は完全には否定できない。

無生物を指す his: AT における用例は 2 例あるが、いずれの場合も AN には対応する語がないため、ラテン語の影響は全く認められない。

抽象名詞の複数形: 15 世紀の英語の文献では頻繁に見られるとされるが、AT には 3 例しかない。うち 1 例は AN に対応する語がないが、他 2 例はいずれも複数名詞に対応しており、ラテン語の影響が考えられる。関連で、動名詞の複数形が AT には多く見られるが、AN では複数名詞の場合と単数名詞の場合に分かれ、前者の場合はラテン語の影響が窺える。

部分属格と二重属格: 部分属格の 2 例のうち、1 例は AN でも部分属格となっており、ラテン語の影響が考えられる。なお、*manner* の後に *of* がつかない例が 1 例あるが、AN の対応箇所には *manner of* に相当する語句自体がないため、AT で前置詞がないのは偶然か、14 世紀初頭以来の英語本来の用法を反映したもののか、いずれかの可能性がある。Fittabile (1957) で挙げられている二重属格の 5 例のいずれも AN では二重属格ではなく、二つ目の名詞句は通常の属格となっており、ラテン語の影響は認められない。

to を伴わない与格間接目的語: 間接目的語が名詞句の場合、AN は 6 例すべてで前置詞を伴わず、うち 5 例は与格となっている。間接目的語が代名詞の場合、AN は 4 例中 3 例で前置詞なしの与格代名詞となっている。ラテン語は名詞・代名詞の文法的機能を示すのに前置詞を必要としないため、AN の対応箇所でも前置詞がないのは自然のことだと言えるが、ラテン語の影響を完全に否定することはできないと思われる。

後置形容詞: 単独の形容詞が単独の名詞を後置修飾する 5 例のうち、4 例は *bairn little* 'small child' で、AN では対応する語句がないが、形容詞なしの単独の名詞があるのみとなっており、この語順にラテン語の影響は認められない。*bairn little* 以外の 1 例では AN でも「名詞 + 形容詞」の語順となっており、ラテン語の影響が考えられる。複数の形容詞が同一の名詞を修飾する場合、一つは名詞の前、残りは名詞の後に来るのが AT では通常だが、例外が 1 例ある。ただし、AN の該当箇所には対応する語句がなく、現代英語の観点では当該の例の語順に不自然さはない。

二人称代名詞の単数形から複数形への移行: 娘が父に話しかけている一文で、親称の単数形を 2 度使った後、敬称の複数形に移行している例がある。AN の対応箇所では二人称代名詞が二つあるのみで、AT での敬称に対応しているものも含めていずれも単数形となっている。したがって、敬称の複数形への移行は AT 独自のもので、丁寧さの度合いを上げるために訳者の判断で行われたものと考えられる。

「of + 目的格代名詞」で所有代名詞の代用 (NP of him vs. his NP): Fittabile (1957) で挙げられている 8 例のうち、AN で 4 例は *his NP* 型、2 例は所有代名詞なしの NP、2 例は対応する語句がないことから、NP of him 型にラテン語の影響は認められない。

再帰代名詞の主語としての使用 : Fittabile (1957) で挙げられている 5 例では、いずれも himself が単独で主語として使われている。AN の対応箇所では再帰代名詞、人称代名詞、強意代名詞、該当語句なしに分かれており、ラテン語の影響は考えにくい。

強調の指示詞 he this : Fittabile (1957) では he this 型の代名詞の連続が 12 例挙げられており、うち 5 例では AN で強意代名詞 hic や iste に対応しているが、残りの例では指示代名詞、関係代名詞、普通名詞、対応語句なしと分かれている。したがって、ラテン語の影響と当時の英語の北部方言に見られる用法の双方に基づくものと考えられる。

以上をまとめると、と、の部分属格、ではラテン語の影響の可能性があり、とでは疑わしく、その他では認められないということになる。ラテン語の影響を明確に断定できる特徴はなく、上記の項目の半数近くはラテン語の影響はないと言えるため、AT は AN の忠実な訳であるという Fittabile (1957) の主張は概ね当てはまらないことが分かる。

続いて、研究代表者が以前調査した経験がある非人称動詞 (Miura 2015) のうち、AT で初めて非人称構文で使われたと MED で記録されている irken 'to be weary, be bored; to be displeased or discontented' および uggen 'to feel loathing or disgust' について調査した。AT には他にも 17 の非人称動詞が見られるが、翻訳の影響は実質ないと言える。これは、AN の該当箇所に非人称構文を含めそもそも対応語句がない場合が多く、あっても受動態や人称構文が対応する場合、AN での非人称構文が AT では人称構文になっている場合さえあるためである。訳者自身の用法 (に関する知識) に基づいて、AN での構文とは関係なく、用法・構文の選択が行われたことが分かる。

irken と uggen についても同様の傾向が見られる。irken の非人称構文における用例 3 例のいずれも AN では非人称構文には対応しておらず、人称構文でさえも原形不定詞や名詞に対応している。uggen の非人称構文における用例 2 例も、AN では同じ動詞が使われているものの、一方は人称構文、他方は現在分詞となっている。人称構文の例も非人称構文の場合と同じ動詞が用いられているケースが見られるが、AN で非人称構文となっている例はなく、現在分詞、人称構文、不定詞や形容詞といった様々な形に対応している。したがって、irken と uggen についても、AN における用法の影響は受けておらず、既存の類義的な非人称動詞との類推に基づいて訳者が自由に構文の選択を行ったことが分かる。

また、研究期間の最後には、「必要」を表す動詞 behove, bir, mister, need, tharf の使い分けについて、AN における用法との比較の観点から調査した。古英語から初期近代英語までの「必要」を表す動詞の競合関係をコーパスに基づいて調査した Loureiro-Porto (2009) は、フランス語由来の mister は AT のみに用例が見られ、「必要」を表す他の動詞とは統語・意味的な違いがないことを示している。結論として、mister が選択されたのは、言語的なバリエーションのためとフランス語から語彙を借用する中英語期の全体的な傾向のためだと述べている。Loureiro-Porto が行っていない、AN の対応箇所との比較を行ったところ、暫定的な結果として、「必要」を表す動詞は AT でそれぞれ独自の統語・意味的特徴を持ち、ラテン語の影響の程度も異なることが分かった。特に mister は、非人称構文・人称構文の選択や補語の種類など、統語的用法が最も固定しておらず、肯定的文脈・否定的文脈の双方で均等に使われる唯一の動詞となっている。一方で、「必要」の具体的な意味は、文脈のみならず AN での具体的な語の選択を反映した結果となっていることが多く、訳者は単に言語的なバリエーションのためだけでなく、AN での文脈と各動詞の統語・意味的特徴を考慮した上で mister を選択したことが窺える。この成果は 2022 年度中に口頭発表し、論文にまとめる計画でいる。

(3) 本研究は AT の語彙と文法に特化した(1)と(2)に並行して、同じくラテン語からの翻訳であるウイクリフ訳聖書における一部の語彙・文法についても関連で調査した。具体的には、far be it というウイクリフ訳聖書で初出の表現について、ウルガタ聖書における対応箇所や中英語期の他の作品における分布を調査した。far be it はウルガタ聖書の absit の直訳として使われているため、その誕生の背後にラテン語の影響があることは確実だが、中英語期における使用はウイクリフ訳聖書(の特に初期訳)とウイクリフの著作に限られている。したがって、当時はあまり慣用的だとみなされていなかった可能性が高く、その後現代英語まで生きながらえたのは、ラテン語の影響以外の側面があると考えられる。

また、who of 'which of' というウイクリフ訳聖書で用例が少なからず見られ、ラテン語の「que 'who' + 属格・前置詞句」の翻訳借用だと言われている表現についても調査した。結果、大半の例ではラテン語の直接的な影響を受けていることは確かだが、純粋にラテン語語法だとはみなせない要因(最古の例にラテン語の影響が見られないこと、原典への忠実さが異なる初期訳と後期訳で、who of の使用に目立った違いが見られないこと、which of の例も散見されること)も見いだされたため、「ラテン語の影響」の程度は多様であることが分かった。

(1)~(3)における一連の成果は、所属研究機関の共同研究プロジェクト報告書や国際学会、海外の出版社刊行の論文集などで発表しており、今後も発表・刊行が控えている。一次資料である AN のエディションが容易に入手できないがゆえに長年行われてこなかった、AT と AN における語彙・文法を詳細に比較調査することで、Fittabile (1957) の「AT は AN の忠実な訳」とい

う見解に反する多くの事例を提示し、15世紀初頭のイングランドにおけるラテン語の受容の一端を明らかにしたことに、本研究の意義があると考えている。

本研究の今後の展望としては、2022～2024年度基盤研究(C)「ウィクリフ訳聖書に見る、ラテン語からの翻訳に基づく語彙・文法とその後の歴史的発達」(課題番号22K00619)において、引き続きラテン語からの翻訳と言語接触との関係を見ていくことになる。原典を直接意識せざるを得ない翻訳という作業を通して、ラテン語の語彙や文法が英語でどのように表されたのか、一次資料に基づく実証的な研究を積み重ねることで、翻訳作品の言語の研究と言語接触の研究を一層連携させ、中英語研究を新たな方向に導くことに微力ながら貢献したい。また、今後は特に、言語外的側面にも可能な限り注視したい。古英語期以来影響を受け続けているラテン語のさらなる受容において、翻訳作業がどのような役割を果たしたかを検証することで、当時のイングランドにおける英語とラテン語の関係についての理解がより深まることを期待したい。

<引用文献>

- Banks, Mary Macleod (ed.). 1904-1905. *An Alphabet of Tales: An English 15th Century Translation of the Alphabetum Narrationum of Etienne de Besançon: From Additional MS. 25,719 of the British Museum*. EETS OS 126-127. London: Oxford University Press.
- Brilli, Elisa (ed.). 2015. *Arnoldi Leodiensis Alphabetvm Narrationvm*. Corpvs Christianorvm, Continuatio Mediaevalis 160; Exempla Medii Aevi 6. Turnhout: Brepols.
- Fittabile, Leo Frank. 1957. An Introduction, Glossary, and Index for *An Alphabet of Tales*. Unpubl. PhD dissertation, Boston University.
- Johnson, Elma L. 1993. An 'Alphabet of Tales': The Genre, Background, Date, and Provenance of the Text, with an Annotated Glossary. (Volumes I and II). Unpubl. PhD dissertation, University of Michigan.
- Loureiro-Porto, Lucia. 2009. *The Semantic Predecessors of Need in the History of English (c750-1710)*. Publications of the Philological Society 43. Malden, MA: Wiley-Blackwell.
- MED = *Middle English Dictionary*. Ed. Robert E. Lewis, et al. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1952-2001. Online edition in Middle English Compendium. Ed. Frances McSparran, et al.. Ann Arbor: University of Michigan Library, 2000-2018. <<http://quod.lib.umich.edu/m/middle-english-dictionary/>>.
- Miura, Ayumi. 2015. *Middle English Verbs of Emotion and Impersonal Constructions: Verb Meaning and Syntax in Diachrony*. Oxford Studies in the History of English. New York: Oxford University Press.
- OED = *The Oxford English Dictionary*. 2000-. 3rd ed. online. Oxford: Oxford University Press. <<https://www.oed.com>>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Ayumi Miura	4. 巻 8
2. 論文標題 Translation effects on the use of impersonal verbs _irken_ and _uggen_ in _An Alphabet of Tales_	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化の比較と交流（大阪大学大学院言語文化研究科言語文化共同研究プロジェクト2020）	6. 最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ayumi Miura	4. 巻 7
2. 論文標題 Some lexical and syntactic comparisons between the fifteenth-century _An Alphabet of Tales_ and the Latin source _Alphabetum Narrationum_	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語文化の比較と交流（大阪大学大学院言語文化研究科言語文化共同研究プロジェクト2019）	6. 最初と最後の頁 19-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ayumi Miura	4. 巻 6
2. 論文標題 The incipient stages of _far be it_ in Middle English	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化の比較と交流（大阪大学大学院言語文化研究科言語文化共同研究プロジェクト2018）	6. 最初と最後の頁 31-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Ayumi Miura
2. 発表標題 Revisiting the earliest history of the optative subjunctive _far be it_ in Middle English
3. 学会等名 31st International Conference of the Spanish Society for Medieval English Language and Literature (SELIM 31, University of Valladolid, Spain) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ayumi Miura
2. 発表標題 Neologisms and reception of Latin vocabulary in _An Alphabet of Tales_
3. 学会等名 32nd International Conference of the Spanish Society for Medieval English Language and Literature (SELIM 32, University of Oxford, UK) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Ayumi Miura	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Peter Lang	5. 総ページ数 340
3. 書名 Of ye Olde Englisch Langage and Textes: New Perspectives on Old and Middle English Language and Literature	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------